

地域の遺跡と結びつけた歴史学習の展開

滋賀県守山市立守山中学校 奥村信夫

1 はじめに

単元「身近な歴史を調べてみよう」は、校区や地域の実態により、その実施時期や取り上げる時代、指導方法などが大きく異なり、各校でさまざまな工夫が求められるところである。

本単元では、地域の遺跡・遺物や行事・風習、文化財などをもとに、地域の歴史を探るとともに、体験的な活動も取り入れ、生徒が歴史を身近に感じる契機にしたいと考えている。指導計画の作成にあたっては、地域の文化財保護課や埋蔵文化財センター、歴史資料館等とよく協議し、講師派遣や資料提供も含めた協力体制を築くことが大切である。

本校では、校区内に「弥生のタイムカプセル」とも称される下之郷遺跡があり、本校の南東約500mに位置している。本単元では、豊富な地下水に守られて、今から2100年も前の動植物や弥生人が使っていた道具や生活跡がそのまま残っているという下之郷遺跡の特長を活かして、米づくりや食といった現在の生活や文化とのつながりを考えさせたい。

下之郷遺跡の位置と平野モデル

2 下之郷遺跡から弥生時代を捉えよう

(1) 第1時：縄文人の生活を考える

教科書p.24に掲載されている三内丸山遺跡をもとに、縄文人の生活の特徴について考えさせたい。

各自がパソコンで公式ホームページ「特別史跡・三内丸山遺跡」を閲覧し、食、交流・交易、環境、集落のようすの4点について調べ、ワークシートにまとめ、発表し合う。縄文人は、クリなどの木の実、イモ類や山菜、ノウサギなどの小動物、マダイ・ブリ・サバなどの魚類を食用とし、「焼く」よりも「煮る」ことが多かったこと、墓と住居は厳密に分け、土地の使い分けをしていたことなどを理解させたい。

(2) 第2時：発掘現場を訪ねる

下之郷遺跡は、東西670m、南北460m、面積25haもある巨大環濠集落であり、2002年に国史跡に指定された。遺跡の保存整備が進むなかで、常時どこかで発掘調査が行われているので、発掘現場を訪れる。生徒に現地で出土状況等について担当者の解説を聞かせ、出土品をふれさせる。解説は専門用語が入り、多少難しくても、こうした体験が下之郷遺跡をぐっと身近なものにし、興味・関心を高め、弥生人の生活に対するイメージを豊かに膨らませることができるのである。

(3) 第3時：遺跡に関する概要説明を聞く

ゲストティーチャーとして文化財保護課の担当者を招き、「下之郷遺跡の発掘調査からみた弥生人の生活」と題した講話を聞く。内容は、発掘調査の方法、下之郷遺跡の「位置」と「大きさ」と「かたち」、弥生時代の戦い、弥生人の食べ物の4点とする。講話では、パソコンを活用したスライドショーでビジュアルな提示となるように工夫し、発掘された磨製石器などの実物も持ち込んでもらうと、より臨場感が出ると思われる。

(4) 第4～5時：弥生人の生活を考える

縄文人の生活について復習したうえで、発掘現

場訪問と講話をもとに、弥生時代の戦いと食べ物から弥生人の生活について考え、縄文人との類似点と相違点に気づかせたい。

3 郷土の弥生人の生活について深める

弥生時代と言えば、稲作と金属器、土地や水をめぐる「むら」間の争いといったイメージが強いが、ここでは、環濠跡や出土品から当時の戦いと食べ物を中心に考えさせたい。

(1) 弥生時代の戦い

「むら」の北西で3条の環濠跡が発見された。環濠はいずれも幅約5m、深さは1.5mほどで、当時は水をたたえていたことを説明したうえで、北西出入口想像図を見てどのようなことがわかるのか、考え発表させる。

下之郷遺跡（第23次地点）
北西出入口想像図

図中の柵や水をたたえた環濠は外敵から「むら」を守る防御施設であったことに気づかせたい。出土した環状石斧や銅剣、木製の盾などの画像を1枚ずつ見せ、どれも武器・武具であり、下之郷でも戦いが頻繁に起こっていたことをイメージさせる。ただ、環濠については、大雨による洪水を防ぐとともに、木を加工しやすくするために木を水に漬けておく役割もあったことを付け加える。

(2) 弥生時代の食べ物

環濠や井戸跡から多くの稲粍が見つまっている。出土した稲粍は、世界の稲の3大品種のどれにあたるのか、図を見て予想させる。

現在、日本で普通に食べられているジャポニカだけでなく、東南アジアで多く栽培されているジャポニカが多く含まれていることを確認したうえで、どうして下之郷ではジャポニカが栽培されていたのだろうかと問いかける。ヒントとして、米以外にあわ、きび、ひえなどの雑穀も栽培されていたことを知らせる。農業技術が低い弥生時代では、悪条件下でも生育しやすいジャポニカや雑穀も栽培し、安定的に食糧を確保していたことに気づかせたい。その後、下之郷でも農業技術が進歩し、ジャポニカが主流となっていった。現在では「近江米」の産地として名高いが、そのルーツが弥生時代にあることを実感させたい。

また、環濠跡からは多くの魚の頭の骨や歯が見つかった。調査した結果、それはゲンゴロウブナと呼ばれ、平常は琵琶湖の沖合に生息している魚であることが分かった。では、どうしてゲンゴロウブナの骨が環濠で見つかったのか、弥生人が琵琶湖まで魚釣りに行って持ち帰ったのか、それとも魚が川を遡上し、近くの川で弥生人に捕まえられたのか、話し合わせたい。現在では、ゲンゴロウブナが産卵のために下之郷までのぼってきたところを弥生人に捕らえられ、体を開いて干して食用にされたと考えられ、滋賀の珍味である「フナズシ」の起源かもしれないことを補足する。最後に、縄文人・弥生人の生活の特徴をレポートにまとめ、発表させる。

4 終わりに

青森県の三内丸山遺跡では、狩りや漁、採集により食料を得ていた縄文人の生活を考え、地元の下之郷遺跡では、栽培した米や雑穀、魚肉（保存食）を食料にしていた弥生人の生活を考えさせていく。縄文人と弥生人の対比を通じて、生徒は弥生人の食生活と現在の米づくりや伝統食とのつながりや相違点について気づくのではないかと考えている。なお、下之郷遺跡の概要は守山市のホームページ掲載のデジタル資料集『ふるさと守山』で閲覧できるので、参照していただきたい。